

明恵と観音試論 ―夢と絵画の交錯―

Myōe and Avalokiteśvara

小林あづみ
KOBAYASHI Azumi

概要：鎌倉時代の華嚴僧、明恵上人（京都梅尾高山寺の中興開祖）について、観音菩薩に関する夢やコメント等を『華嚴經』や『華嚴經』の内容を絵画化した作品と対比させて考察した。結果、明恵が夢に見た観音は、自身が制作に関与した華嚴変相図に基づくものであり、観音の住む補陀洛山を夢に見、普陀山（補陀洛山の写しとして知られる中国の観音霊場）を意識した場で仏事を行ったことが判明した。また、明恵が華嚴の守護神として祀った善妙についても、その働きを観音と同一視している。明恵による観音への直接的言及は少ないが、その特色として挙げられる点（紀州での修行、法然による著作への反論、五秘密への傾倒、善妙を神として祀り善妙寺を建立する）の基底には観音があったのではないかと結論づけた。

Abstract: In this paper I examine the Buddhist monk Myōe, who re-established Kōsanji from his dreams and his comments on Avalokiteśvara. His dreams of Avalokiteśvara are based on the mandalas of Avataṃsaka Sūtra in which he was deeply and creatively involved. He also dreamt of Mount Potalaka where Avalokiteśvara lives, and held Buddhist ceremonies at places similar to Mount Putuo. He worshiped Shanmiao as the guardian deity of the Kegon school and regarded her in the same light as Avalokiteśvara. Although Myōe really referred to Avalokiteśvara, my conclusion is that his unique activities as a monk are based on Avalokiteśvara.

キーワード：夢記、華嚴海会善知識曼荼羅、華嚴海会諸聖衆曼荼羅、華嚴宗祖師絵伝、長谷寺、補陀洛山、普陀山、五秘密、善妙

Key words : Record of dreams, Mandara of the spiritual teachers visited by boy Sudhana, Mandala of various Buddhist divinities related to the Avataṃsaka Sūtra, Illustrated Biographies of the Kegon school Patriarchs, Hase-temple, Mount Potalaka, Mount Putuo, the Five Esoteric Ones, Shanmiao

はじめに

仏法・王法滅尽し了るか。凡そ言語の及ぶところにあらず。筆端の記すべきにあらず。余この事を聞き、心神屠ふるがごとし¹。

（治承四（1180）年、南都焼き討ちの報に接した九条兼実の記録）

我々後世タスカラムト云者ニアラス

（『明恵上人遺訓抄出²』）

京都梅尾の高山寺は、明恵上人（明恵房高弁、承安三（1173）年 - 貞永元（1232）年）を中興開祖とする。明恵が生きた鎌倉時代は、源平の争乱、南都焼き討ちに加え末法（永承七（1052）年～）の到来による国家（王法）

と宗教（仏法）の衰退に、僧侶達がそれぞれの立場から応えようとした。明恵もその一人であり、その修行には様々な側面があることが指摘される³。東大寺や神護寺で華嚴と真言を修学したほか、「明恵上人樹上坐禅像⁴」にみられるような修禅も知られている。また、亡くなった父母への思慕が、それぞれ釈迦如来、仏眼仏母如来への思慕へと昇華され、釈迦への値遇を望み、弥勒菩薩の浄土である兜率天への上生（を経て釈迦の元へと向かうこと）を願ったこと、十代の頃に文殊菩薩の真言を日に千遍唱え仏道成就を祈請し、その後紀州の白上峯にて文殊菩薩の示現にまみえ、仏智を体得した立場からの著述や講説を行ったこと等が挙げられる。

明恵以降も学問のセンターとしての地位を誇った高山寺には、現在も多くの典籍が蔵される。各時代の学僧たちによるアプローチを経て、戦後は高山寺典籍文書調査

団による語学、歴史学、文学、仏教学等からの研究成果が蓄積され続けている⁵。

ただ、本稿のテーマとする観音菩薩に関しては、特に指摘がないまま現在に至っている。明恵は「夢を見ることを通常の覚醒時の『学問・学業』と同様の知的な修行と見なしていた⁶」が、稿者は明恵上人の『夢記』に関する資料調査・翻刻と解釈を行ってきた⁷。その立場から夢の記述を手がかりとして、以下に明恵の観音菩薩観を探る。

なお、資料の引用には原則として旧字体は新字体に改め、踊り字は開いた。改行は / で詰めた箇所がある。本文の年次は元号に（ ）内で西暦を、参考・引用文献では西暦に（ ）内で元号をそれぞれ示した。参考図版として挙げた作品および略称で示した頻出文献については、末尾に作品と文献のデータをそれぞれ示した。

1. 明恵の生涯

まず、明恵の生涯について、本稿と関わりのある事蹟を中心に挙げる。

承安三（1173）年 紀伊国在田郡石垣莊吉原村（現在の和歌山県有田郡）にて誕生。父は平重国（平家に仕えた伊勢の伊藤氏出身で高倉院に仕えた北面の武士）、母は湯浅宗重（紀伊最大の勢力を誇った湯浅氏発展の基礎を築いた人物）長女。

治承四（1180）年 父母を亡くす。母の妹の夫、崎山義貞が養父となる。

養和元（1181）年 京都の神護寺に入寺。母方の叔父にあたる上覚房行慈（神護寺復興をすすめる文覚の門弟）に託される。神護寺での修学のほか、華嚴（仁和寺華嚴院景雅より）、出家後に俱舎（東大寺尊勝院聖詮より）、真言（勸修寺慈尊院興然より）も学ぶ。

文治四（1188）年 上覚について出家。明恵房成弁（のちに高弁）と名乗る。

建久二（1191）年 この頃より夢記をつけはじめる。

建久四（1193）年 東大寺尊勝院の弁暁より華嚴復興のため公請（朝廷から法会や講義に招かれること）への出仕を求められ、一・二年東大寺に通う。

建久六（1195）年 紀伊国下向。湯浅莊巢原村の白上峯に草庵を構え修行。

建久七（1196）年 仏道に純粹に打ち込むため、身をやつすことを考え右耳（の一部）を切る。その後虚空に文殊菩薩が示現する。

建久九（1198）年 『随意別願文』等を撰述。釈迦に遅れた悲しみと華嚴を知った喜び、精通への願いを述べる。またこの頃、学問上の文献不足のため神護寺に戻るが、「騒動」のため秋頃再び白上峯に戻る。

建仁元（1201）年頃 石垣莊糸野の成道寺（湯浅宗光（宗重子息）邸宅内）背後の草庵に居住。同法（＝弟子）十名ほどの集団とともに修行。

建仁三（1203）年正月 湯浅宗光妻を通し、春日明神託宣。明恵の渡天計画をとどめる。

元久元（1204）年 神谷山寺（紀伊国）近くに設けた草庵に移る。湯浅氏の地頭職を巡る混乱のため。

元久二（1205）年 二度目の渡天計画時に身体に異変が起きる。本尊釈迦如来、善財五十五善知識、春日大明神前で祈請による籤の結果断念し治癒する。

建永元（1206）年 後鳥羽上皇の院宣により、神護寺の梅尾別所を賜る。『華嚴經』より高山寺と号す。

承元元（1207）年 東大寺尊勝院の学頭（学事を統括する役）の院宣が下り、一・二年東大寺に通う。

建暦二（1212）年 『（於一向専修宗選択集中）摧邪輪』、撰述。法然の『選択本願念仏集』への反駁書。

建保二（1214）年 『持經講式』撰述。『円覚經』、『華嚴經』（十無尽蔵品・如来出現品）を讃歎する講の式次第。

建保三（1215）年 「四座講式」撰述。涅槃会のための四種（涅槃、十六羅漢、如来遺跡、舍利）の講の式次第。釈迦涅槃後に十六羅漢に正法が伝えられることや釈迦が奇跡を起こした八大霊塔について言及する。涅槃会はこの後高山寺恒例となる。

建保六（1218）年 賀茂別所（仏光山、上賀茂社神主の賀茂能久が造立）に移る。

承久二（1220）年 梅尾へ戻る。

9月『華嚴修禪観照』入解脱門義』を著す。仏光三昧観（毘盧舎那如来の光を観想する行法。唐の李通玄（635-730、年次異説あり）の著作の影響により行う）を理論的に説く。

11月 夢に仏光三昧観の折の毘盧舎那仏を見て、その姿を描く（図2）。

承久三（1221）年5月 承久の乱。敗者側を保護する。

9月『華嚴信種義』撰述。賀茂能久の子息、久継よりいかにして信を確立できるのかという問いかけに、華嚴の立場から答えたもの。

11月 『華嚴仏光三昧観秘宝蔵』撰述。顕教の五聖と密教の五秘密が同体であることを述べたもの。

貞応二（1223）年 高山寺の別院、善妙寺の供養。承久の乱における敗者側の女性達が修行した尼寺。

嘉禄二（1226）年 上覚示寂。棺に種子真言を書く。

嘉禄三（1227）年6月 五秘密法を修し、そのシンボルを夢に見る。

9月 紀州白崎の大石室で五秘密法を修す。

安貞二（1228）年 『光明真言土沙勸信記』『同勸信別記』撰述。僧俗に対し光明真言（による加持土砂）を現世、後世の二世に亘る意義があるものとする。

安貞三（1229）年 紀州施無畏寺開山供養式に参向。

寛喜四/貞永元（1232）年正月 示寂。六十歳。

2. デフォルト（PC用語）としての観音

明恵と観音との関係は、他の尊格に比べ目立ったエピソードに欠けるが、明恵の生誕と仏道への志向は観音の影響下にあることが、明恵の伝記として信頼度の高い資料である『高山寺明恵上人行状』（明恵の高弟である義林房喜海の記した記録に依拠し、仮名（上下2巻）と漢文（上中下3巻）の二種が現存する）等からうかがえる。また、明恵の修行を支えた故郷、紀州の地も古くからの観音霊場であった。紀州の地については後述するが、明恵にとって観音は下記のように基盤ともいえる存在であった。

① 明恵の母は、京都の六角堂（頂法寺、本尊は如意輪観音）に万度詣でを企て、その間に一万巻の『観音経』を読誦し、我が後生を助け仏弟子として尊い子息を授かることを祈請し、明恵を懐妊した。（行状上 p.11）

② 明恵は二歳の時、乳母に抱かれて、京都の清水寺（本尊は十一面千手観音）に参詣し、読経や礼仏のさまに信心を起こした。これが明恵にとって仏法を尊く思った最初の経験であった。（行状上 p.12）

③ 明恵が二十代以降修行の地とした紀州の白上峯の麓や、二回目の渡天計画をとどめた奇瑞が起きた宮原宗貞の居館（紀伊国在田郡宮原荘）の周辺からは、それぞれ平安期のものとされる十一面観音の懸仏が出土し、また宮原には円満寺（天平期の十一面観音を創建以来の本尊とする）も所在する。つまり、古くからの観音信仰が見られた場所で明恵は修行を深めていった⁸。

④ 後のことではあるが、承久元（1219）年冬に整備さ

れた高山寺の金堂にも、古仏の十一面観音が安置されている⁹。金堂の当初の本尊は、快慶作の釈迦如来であり、翌年に安置された脇侍のうち、一体は古仏を修復した十一面観音像であった。のちに（承久三年十一月）釈迦像ともう一体の脇侍である弥勒像は賀茂別所に移されたが、観音像は金堂に安置され続けた¹⁰。

院政期には仏事や新造の堂宇の本尊に古仏を使用するようになるが、その背景には新造の尊像にはない靈驗性の高さを求める（仏像の生身性への指向や靈驗性を持つ尊像の模刻等）動きがあったことが指摘されている¹¹。明恵の周囲には靈驗性の高い尊像が安置されていたが（行状下 p.51、p.74、縁起 p.637等）、この十一面観音像も、同様の像であった可能性を考えても良いだろう。

⑤ 明恵は上賀茂社神主の賀茂能久とその子孫たちと深く関わった（賀茂別所に寄進される等）が、上賀茂社には当時、神宮寺観音堂があり（図4-1、4-2）¹²、また後世の記録ではあるが上賀茂社祭神の本地は観音であるとされた¹³。

⑥ 明恵の渡天をとどめる託宣等で知られる春日社の第一殿、第四殿の本地はそれぞれ不空罽索観音（貞慶らによって釈迦とも）、十一面観音であった。

以上の点から、明恵にとって観音は、PC用語を利用して述べれば物心つく前からインストールされている尊格であり、神護寺を去って白上峯に草庵を結び過酷な修行に臨んだ折に支えた地において古くからの信仰を得ており、その後活動の拠点とした高山寺の本堂や賀茂社にも祀られ、渡天の断念を促す託宣に深く関わった春日社でも本地とされた尊格である。つまり、自身が後からカスタマイズする（釈迦・文殊・弥勒などは尊像を造っている）ことなく、最初から設定された（＝デフォルト）存在であったといえる。

3. 阿弥陀信仰とのかかわり

高山寺には、明恵の母の遺品という、美しい櫛があり、金泥で、「南無阿弥陀仏」と記してあります。寺へ入るとき、ひそかに懷ろに入れて持って来たものでしょう

（白洲正子『明恵上人』¹⁴）

3-1. 「華嚴海会善知識曼荼羅」の観音

ここで、明恵が夢に観音を見たケースを検討する。以下に挙げる夢記は陽明文庫に蔵され、法然の著作に対して反駁した『摧邪輪』（建暦二（1212）年）および『摧邪輪莊嚴記』（同三年）の著述に関わる内容である。

【夢想1】¹⁵

【翻刻】

- 115 一同七日夜夢
116 有人欲造塔其本^ノ爲^ニ東大寺
117 ト覺^{シキ}處^ニ塔^ノ有處^ヘ行^ク其
118 處有^ニ大堂其中大座上^ニ如大佛
119 ヨリモ大身^{ナル}女像^{アリ}思惟^ノ手^{アリ}
120 欲拜之背面又其對坐^ニ同様
121 ナル女像^{アリ}向之奉拜^ニ不背面
122 心思^{ハク}皆是觀音也其傍有一人僧
123 對此女人云一向專修^ヲ破^{タル}書^ハ此
124 御房^ノ造^テ候也即舒手摩高
125 弁之頭即云此比專修^ノハヤリタレハ
126 善導^(ママ)寂^ノキタルカト思^{タレハ}眞濟
127 僧正ノマウテキタリケル物^ヲ被仰
128 心^ニ思^{ハク}是深位^ノ大士^{タルニ}依^テ
129 祖師達^ヲメケニ被仰サテ此御房
130 暫ク高弁^ヲ不制^{セムト}思召^欤ト
131 思^テ此御房^ノ頭^ヲ今摩給^ヲ何^ニ
132 ト被仰高弁其御氣色^ヲ見^{テモ}
133 タ^ハ何^{ニテモ}仏者糸惜ト思召セ□□
— (紙継) —
134 摧邪輪以外^ニ御感^{アリ}ト覺^(ニ)□
135 此女像後^ニ反^{シテ}赤色^ノ人^ト成
136 即互^ニ有親馴之儀即問云□誰人手
137 反問曰御房長谷寺へ參^欤答曰不尔又問曰御房片方^ニ祝居^欤
138 即心案思出楊柳觀音御事答曰此事^欤答曰尔也即今ハ心得ト思^テ歷然云々
138A 此奥奉建
138B 觀音也^處

【訓読】

一、同じき七日の夜の夢に、人有りて塔を造らむと欲^{おも}ふ。其の本の為に東大寺と覺しき處に塔の有る處へ行く。其の處に大堂有り。其の中の大座の上に大仏の如きよりも大身なる女像あり。思惟の手あり。之を拜まん^{おも}と欲ふに、面を背く。又、其の對坐に同様なる女像あり。之に向ひて拜み奉るに、面を背けず。心に思はく、「皆是れ觀音なり」。其の傍らに一人の僧有り。此の女人^{むか}に對ひて云はく、「一向專修を破したる書は此の御房の造りて候ふなり」と。即ち手を舒べて高弁の頭を摩^(ママ)づ。即ち云はく、此の比、專修のはやりたれば、善導^(ママ)寂の來るかと思

ひたれば、眞濟僧正のまうで來たりける物をと仰せらる。心に思はく、「是れ深位の大士たるに依りて、祖師達をもなめげに仰せらる」。さて、此の御房、「暫く高弁を制せざらむと思し召すか」と思ひて、「此の御房の頭を今摩で給ふを何に」と仰せらる。高弁、其の御氣色を見ても、ただ「何にても仏者糸惜しと思し召せ□□『摧邪輪』、以ての外に御感あり」と覺ゆ。此の女像、後に反じて赤色の人と成る。即ち互いに親馴の儀有り。即ち問ひて云はく、「□誰人の手なるや」。反りて問ひて曰はく、「御房、長谷寺に參るか」。答へて曰はく、「爾らず」。又問ひて曰はく、「御房、片方に祝居るか」。即ち心に案じて楊柳觀音の御事を思ひ出だす。答へて曰はく、「此の事なるか」。答へて曰はく、「爾なり」。即ち今は心得と思ひて歷然たりと云々。

(欄外) 此の奥、觀音を建て奉る處なり。

東大寺の大仏殿のような場所で二体の巨大な尊格を觀音^(ママ)と思い、そのうちの一体が明恵の著作、『摧邪輪』を評價し明恵を摩頂(後述)した。女像はその後「赤色ノ人」(觀音が衆生済度のため三十三の變化身を現すことと関係するか¹⁶)となり長谷寺に関する問答があったという夢であるが、實際、当時の東大寺大仏の脇侍は、左脇侍が「觀音」、右脇侍が「虚空藏菩薩」とされている。また觀音像は右手を施無畏印、左手を膝上で与願印とし、左足を踏み下ろした二臂像で、右脇侍の虚空藏菩薩は、左脇侍と左右対称の姿であったことが指摘されている¹⁷。明恵が夢に見た女像と實際とは印相が異なっていることになるが、夢にあらわれた印相と同じ觀音像として指摘できるのは「華嚴海会善知識曼荼羅」(頼円筆 東大寺所蔵 図1-1、図1-2)に描かれる觀音である。

この善知識曼荼羅は『華嚴經』「入法界品」に説かれる、善財童子の善知識(人の師となる高德の修行者)歴參を小区画に分けて描いたものである。裏書から高山寺にて描かれ、明恵所持の善知識曼荼羅を写した可能性が非常に高い作であると考えられている¹⁸。中尊の毘盧舍那如来は宝冠を被り、通肩の白衣を着け白蓮華座に結跏趺坐し、兩腕を曲げ手のひらを上に向け、第一・三指を捻じる特異な印相を結ぶ。この印相は、宋代以降の図像に見られ、明恵の著作『華嚴仏光三昧觀秘宝藏』(承久三(1221)年撰述)に

次於宝座上。可觀毘盧舍那像。其形者。一乗教主載著花冠環珞莊嚴等身量也。其手印者。可依唐本善知識中尊図。屈二肘近身。以二腕向外。以二大指捻二中指甲

初分。余六指舒屈如承物勢。是則說法印也¹⁹。

【訓読】

次に宝座上に毘盧舎那像を觀るべし。其の形は一乗教主にして、花冠・瓔珞・莊嚴等を載著する身量也。其の手印は唐本善知識中尊図に依るべし。二肘を屈し身に近づけ、二腕を外に向け、二大指をもって二中指の甲の初分を捻じ、余の六指は舒べ、物を承くが如きの勢なり。これ則ち說法印也。

と記されてもいるため、明恵がこのような印相を持つ毘盧舎那如来を本尊として仏光三昧觀を行じ、夢にも見る(図2)ほど強く意識していたことがわかる。

明恵はこの宋本に基づくスタイルの善知識曼荼羅の普及につとめている。以下に善財善知識に関する明恵の事蹟を挙げる²⁰が、明恵にとって善財善知識は重要な決断の支えになり、夢に現れ、臨終時まで寄り添う存在であることがわかる。

建仁元(1202)年11月頃 建久年間(1190-1199)に写した唐本の「善財善知識」の紙形による四幅の「善財善知識曼荼羅」を、絵仏師俊賀に描かせる。明恵に帰依した湯浅宗光の妻の援助による。この曼荼羅が流布するきっかけとなった。(漢文行状中 p.110)

建仁二(1202)年2月頃 成道寺(糸野)にて完成した「善財善知識曼荼羅」供養。のちに東大寺尊勝院に施入。(漢文行状中 p.111)

9月 成道寺(糸野)にて『華嚴入法界頓証毘盧遮那字輪瑜伽念誦次第』一卷を撰述。(同書奥書)

10月 『善財善知識念誦次第』伝授。

この頃 興然本『善知識衆芸童子法』一卷を書写。

承元三(1209)年3月 善財童子の像が生身となる夢を見る。(山外本1-10、39-49行)

承久二(1220)年11月 光明法を修し、平岡尼公ら三十人ほどを夢に見、善知識と思う。(十篇443行)

建仁三(1223)年正月 春日明神託宣。明恵の渡天計画をとどめる。明恵は善財五十五善知識図の前で託宣の実否を祈請する。(『明恵上人神現伝記』明資一 p.237,238)

(年次異説あり) 9月 成道寺(糸野)にて『善財善知識念誦次第』一卷を撰述。(『上人所作目録』明資五 p.410)

元久二(1205)年春 再度の渡天計画による身体の変異。本尊釈迦如来、善財五十五善知識、春日大明神の前で祈請による籤の結果断念し治癒。(漢文行状中 p.123)

建暦元(1211)年 九条道家のもとに「五十五善知識像一鋪神妙之本尊」を持参し法談。道家がかねてから写し取りたいと望んだ図。(『玉蕊』同年十月一日条)

建保三(1215)年11月以降 『五十五善知識講式』一卷を撰述か。

貞応元(1222)年夏頃 賀茂仏光山にて善知識供をはじめ。(行状下 p.56)『毎月善知識供式』撰述。12月 夢に十五、六歳の女人三十余人ほどが近くにいたのを見る。五十五聖だと思ふ。(『最後臨終行儀事』明資一 p.568)

寛喜二(1230)年2月 善財五十五善知識について十通りの考え方を同行らに示す。その間に五十五善知識の木像が生身となり、来世のことを尋ねようとしたが愚問だと思ふ夢を見る。(行状下 p.62、63)

寛喜四(1232)年正月 示寂の折、「我、戒を守る中より来る」という最期の言葉を喜海が聞く。これは『華嚴経』「入法界品」で弥勒菩薩が善財童子に語った言葉に依拠する。(行状下 p.80)

安貞年間(1227-1229)以降 高山寺禅定院の西面持仏堂に「華嚴聖衆曼荼羅」「善財五十五知識」図が描かれる。(縁起 p.645)

寛喜年間(1229-1231)以降 高山寺舍利塔に絵仏師俊賀が「華嚴善財善知識図」を描く。(縁起 p.639)

不明(建仁三年頃?) 貞慶に華嚴善知識曼荼羅を贈る。(歌集112、113)

図1-2では善財童子が出会う観音菩薩は二臂像で金剛座に座し、右手は思惟の印相をとる。後世の記録ではあるが、応永三十(1423)年にこの図の修理を行った東大寺如意輪院の澄賢は、観音像について自身が長年信仰してきた如意輪の姿であり、他には作例のないものであると述べ、本図における観音の姿が特異であることを指摘している²¹。つまり、明恵が【夢想1】で見たのは、『華嚴経』(『法華経』等ではなく)に説かれる善財童子が出会った観音菩薩から頭をなでられる(=摩頂、ここでは法然の著作への反駁書を著述したことへの承認の意)というものであった。

摩頂は多くの經典に見られ、一般的には仏が行者に授記（将来悟りを得ることを予言する）時に行われる。その他に加持（加護）の意味を持つが、『華嚴經』「入法界品」では、善財童子の智慧の完成を承認する意味を持っている。このような明恵の著作への是認・賞賛としての摩頂は他の夢にも見られる。次に、同じく陽明文庫に蔵される夢の例を挙げる。

【夢想2】²²

【翻刻】

一紙継一
182 一同廿六日^(ママ) 夜書持經講式至
183 第二段書了至夜半熟眠夢^云
184 有大伽藍有盧舍ナ三尊左右
185 脇士聖僧也右面聖僧御前^{ニシテ}
186 合掌餽跪礼言
187 南无尺迦如来遺法中大聖弟子
188 聖僧反爲生身種々誘引云不同
189 邪見徒是汝之^井也心地額高^{クシテ}
190 一横理有也^ト思^フ聖僧舒手^テ付額
191 ^テ種々^ニ讃嘆即言善哉正見々々
192 々々心罪障皆消滅身心安適即舒
193 右手垂涙广頂給高弁又流
194 涙合掌頂礼

【訓読】

一、同じき廿六日^(ママ) 夜、持經講式を書く。第二段に至るまで書き了ぬ。夜半に至り、熟眠す。夢に云はく、大伽藍有り。盧舍ナ三尊有り。左右の脇士、聖僧なり。右面の聖僧の御前にして合掌餽跪し、礼して言はく、「南无釈迦如来遺法中大聖弟子」。聖僧、反じて生身と為り、種々誘引して云はく、「邪見の徒と同じからず。是れ汝の菩薩なり」。心地に、額高くして、一の横理有るなりと思ふ。聖僧、手を舒べて、額に付けて、種々に讃嘆す。即ち言はく、「善哉正見、善哉正見、心罪障皆消滅、身心安適」。即ち右手を舒べ、涙を垂れ、摩頂し給ふ。高弁、又、涙を流し、合掌頂礼す。

『華嚴經』「十無尽藏品」「出現品」を讃嘆する『持經講式』全三段のうち第二段まで書き進めた明恵の夢に、華嚴經主である毘盧舍那如来と脇侍が登場する。【夢想1】と非常によく似た構造を持った夢であり、ここで脇侍の聖僧が「邪見」の者ではないと言い明恵を「正見」の者と評価して摩頂することは、明恵の著述が正しい内容である

という是認・賞賛の意をあらわしている²³。

3-2. 「華嚴海会諸聖衆曼荼羅」の観音

【夢想2】における『持經講式』著述に対する明恵への摩頂が、毘盧舍那如来の脇侍である「聖僧」によるものであることを考慮すれば、【夢想1】の観音による摩頂は（法然がその浄土への往生を望んだ阿弥陀如来を連想させる）毘盧舍那如来の脇侍からであることに意味があると考えられる。それを裏付けるのが、楊柳観音への言及である。これも明恵が関与した華嚴変相図のなかに手がかりがある。

図3の「華嚴海会諸聖衆曼荼羅」（高山寺蔵）は、八十卷本『華嚴經』に登場する諸尊を区分けして描き、毘盧舍那如来の説法を象徴的に示したもので、他に類例を見ない作である。特に中央の三尊（毘盧舍那如来・観世音菩薩・大勢至菩薩）構成は特異なものとなされ（一般的には文殊・普賢が脇侍となる）、高麗あるいは宋の作品に基づくもので、制作には明恵の直接的な関与があったと推定されている²⁴。また、観音は左手に柳枝をとり、右手に鉢を受ける姿をとるが、この姿は南宋画の阿弥陀三尊像の脇侍に作例がある。つまり、図3の毘盧舍那如来は阿弥陀と団体であることを暗示しているが、この背景には

1. 『華嚴經』「入法界品」において、（西方のみではなく）十方世界に充滿する無量寿仏が説かれることから中国の華嚴宗の澄観（第四祖、738-839）、宗密（第五祖、780-841）が毘盧遮那如来と阿弥陀如来の団体説を説いたこと²⁵

2. 明恵が華嚴を学んだ景雅をはじめとして、当時の華嚴宗では極樂往生が強く主張されたこと²⁶

3. 明恵自身も釈迦と阿弥陀について、華嚴の立場からは「阿弥陀如来一向本師釈迦同躰分身ノ仏²⁷」と説き、3-1で採りあげた『摧邪輪莊嚴記』では「阿弥陀仏とその浄土は毘盧遮那仏の方便として包摂される²⁸」と考えていたことが指摘できる。つまり、明恵は法然の著作（阿弥陀如来への専修念仏）を批判するなかで、自らが関与した華嚴変相図中の尊格（阿弥陀と団体の毘盧舍那の脇侍である観音）を夢に見、自身の論に確信を得たといえよう。

なお、この夢の他にも『摧邪輪莊嚴記』を撰述する間、「種々ノ靈夢靈相」があったことが知られるが、その一つとして、一人の人が明恵の顔に「観音」と書き、もう一人が「善導」（中国浄土教の大成者。唐の太宗・高宗の時代に活躍し、その著作は法然が専修念仏を唱道した

きっかけとなった）と書いた夢が知られる²⁹。ここでも観音を夢にみていることは、法然の著作に対する上で、明恵が阿弥陀の脇侍としての観音をいかに重視していたかを示していると言えよう。

3-3. 長谷寺観音の金剛座

この他に、図1の「華嚴海会善知識曼荼羅」に描かれる、観音の座す金剛座も、【夢想1】の長谷寺についての言及部分に影響を与えていると推測される。

長谷寺は奈良県桜井市にある観音霊場として古来より著名である。本尊は当初、楠の霊木で像造された三丈三尺の十一面観音で、その靈験は『源氏物語』『今昔物語』などの文学作品にも記されている。この本尊が立つ岩座は地中の大盤石から生じており、大盤石からは更に一枝が釈迦が悟りをひらいた金剛座へ、もう一枝が補陀洛山（観音の住処、後述）の金剛宝石へとつながっているという説が記録に見える³⁰。

古老口伝云、南閻浮提大地底有_ニ大盤石_一、枝分_ニ三_一。一摩伽陀国中心。金剛座之石也、三世諸仏必着_ニ此石座_一、成_ニ覺_一給_ニ指_ニ南方_一、南海中補陀落山也、一枝此長谷寺観音之所座也³¹

金剛座とは、仏菩薩の金剛堅固の座所、特に釈迦が悟りを開いた場所を指し、『俱舍論』等に見える。明恵が渡天計画を練る上で参考にしたとされる『大唐西域記』（巻第八 摩揭陀国上）には、

菩提樹垣正中。有金剛座。昔賢劫初成。與大地俱起。據三千大千世界中。下極金輪。上侵地際。金剛所成。周百餘步。賢劫千仏坐之。而入金剛定。故曰金剛座焉。証聖道所。亦曰道場³²。

【現代語訳】

菩提樹〔を取り巻くところ〕の垣の真中に金剛座がある。昔、賢劫の初めにできたもので、大地と共に出たものである。三千大千世界の中に掘り、下は金輪に達し、上は地面に表われている。金剛で作られ、周囲は百余歩ある。賢劫中の千仏がここに坐り金剛定に入られたので金剛座と言い、悟りを開かれた所であるので〔菩提〕道場とも言う³³。

とある。【夢想1】の欄外には長谷寺に関する記述に続けて「観音を建て奉る処なり」という記述が補足される。

この一文の意味は、長谷寺本尊の立つ岩座が、釈迦が悟りをひらいた金剛座とつながっていること、また次に続く文において、明恵は楊柳観音のことを思い出しているが、それは図3の楊柳観音が、右手に楊柳、左手に鉢（釈迦を暗示する）を持つことを前提とすることで理解できる。ここからも【夢想1】は、『摧邪輪』『摧邪輪莊嚴記』の評価に関わって、明恵が重視した華嚴変相図が重要な位置を占めていたといえる。

なお、明恵は中年にいたり樹を莊嚴して菩提樹とし、石を重ねて金剛座として天竺の様子を再現し、涅槃会を行っているが³⁴、既に建仁三（1203）年（＝『摧邪輪』執筆以前）に金剛座に関する夢を複数回見ている。【夢想1】の伏流として、以下に指摘しておく。

【夢想3】³⁵

【翻刻】

一、我周囲疊石鎮護、〈富貴相也云事 / 大井御加護也、〉

【訓読】

一、我が周囲に石を疊みて鎮護す。富貴の相也と云ふ事、大菩薩の御加護也。

【夢想4】³⁶

【翻刻】

106 一同十二月十五日夜宿四達夢^云
107 成弁立一橋上坂東兵衛佐
108 殿来口式神盛多石去成弁
109 之身五六尺許^ニ重石^ヲ圍之
110 上師見之云此富貴相也^{云々}

【訓読】

一、同じき十二月十五日の夜に四達に宿る。夢に云はく、成弁、一の橋の上に立ちて、坂東の兵衛佐殿来たる。口、式神多くの石を盛る。成弁の身を去ること五六尺許りに石を重ねて、之を圍む。上師、之を見て云はく、「此れ富貴の相なり」と云々。

4. 殊勝なところ―補陀洛山の観音、光明真言

前項までは観音への直接的言及の見られる夢について検討したが、明恵の夢には観音の住むという補陀洛山の様子を暗示するものがある。このような夢はしばし、明恵が修行した紀州の風景が反映したものと解釈されてきたが、以下に再検討を加えたい。まず、『華嚴経』等に説かれる補陀洛山の様子を挙げる³⁷。

1. 六十卷『華嚴經』「入法界品」（補陀洛山ではなく「光明山」と記される）

漸漸遊行至光明山。登彼山上周遍推求。見觀世音菩薩住山西阿。處處皆有流泉浴池。林木鬱茂地草柔軟。結跏趺坐金剛寶座。無量菩薩恭敬圍遶。而爲演說大慈悲經。普攝衆生³⁸。

【訓読】

漸々に遊行して光明山に至る。彼の山上に登り周遍推求するに、觀世音菩薩、山の西阿に住するを見る。処々皆流泉浴池有り。林木鬱茂し、地には草柔軟たり。金剛宝座に結跏趺坐し、無量の菩薩恭敬圍遶す。為に大慈悲の經を演説し、普く衆生を攝す。

2. 八十卷『華嚴經』「入法界品」

於此南方。有山。名補怛洛迦。彼有菩薩。名觀自在。汝詣彼問。菩薩云何。學菩薩行。修菩薩道。即說頌曰

海上有山多聖賢 衆寶所成極清淨
華果樹林皆遍滿 泉流池沼悉具足
勇猛丈夫觀自在 爲利衆生住此山
汝應往問諸功德 彼當示汝大方便

（中略）

漸次遊行。至於彼山。處處求覓此大菩薩。見其西面巖谷之中。泉流縈映。樹林鬱鬱。香草柔軟。右旋布地。觀自在菩薩。於金剛寶石上。結跏趺坐。無量菩薩。皆坐寶石。恭敬圍遶。而爲宣說大慈悲法。令其攝受一切衆生³⁹。

【訓読】

此の南方に山有りて補怛洛迦と名付く。彼に菩薩有り、觀自在と名づく。汝彼に詣りて菩薩とは何と云ふかを問ひ、菩薩行を學び菩薩道を修すべし。海上に山有りて聖賢多く、衆寶成す所極めて清淨なり。華果樹林皆遍滿し、泉流池沼悉く具足す。勇猛丈夫觀自在、衆生を利す為に此の山に住す。汝まさに往きて諸功德に問ふべし、彼まさに汝に大方便を示すべし。（中略）漸次遊行して、彼の山に至り、処々に此の大菩薩を求覓む。其の西面の巖谷の中を見れば、泉流縈映し、樹林鬱鬱し、香草柔軟にして、右旋して地に布く。觀自在菩薩、金剛寶石上に結跏趺坐し、無量の菩薩は皆寶石に坐し恭敬圍遶す。為に大慈悲の法を宣説し其れをして一切衆生を攝受せしむ。

また、『大唐西域記』（卷第十 秣羅矩咤国 布咀落迦山）にも以下のように記述される。

山径危險。巖谷欹傾。山頂有池。其水澄鏡。流出大河。周流繞山二十匝。入南海。池側有石天宮。觀自在菩薩往來遊舍。其有願見菩薩者。不顧身命。厲水登山。忘其艱險。能達之者。蓋亦寡矣⁴⁰。

【現代語訳】

山道は危険で、巖谷は峻険である。山頂に池があり、鏡の如く澄んでいる。水は流れて大河となり、山をめぐる流れること二十周で南海に入る。池の側に石造りの天[人の]宮[殿]（堂宇のこと）がある。觀自在菩薩が往來し泊まれる所である。菩薩を見たてまつろうと願うものは、身命を顧みず河水を渡って山に登る。艱難を物ともせず行きつくことのできるものは、大変に少ない⁴¹。

以上の記述をふまえた上で、明恵の夢の例を検討する。

【夢想5】⁴²

【翻刻】

50 一同廿一夜夢^云
51 從佐渡前司之許送書大臣殿之
52 御書^坎と思疊紙等之種々物五六種
53 在之心思此時十二月晦日也明日正月一^(日)口
54 此返書^ヲ欲遣心思^{ハク}是大吉也
55 又夢金堂邊有切木之組此下有池
56 過此^ヲ到紀洲其次至處又殊勝靈
57 處^ト思即行之^ニ有大海其濱^ヲ行
58 有大山峯過此^ヲ重々^{ナル}巖^ノ可有^ヲ
59 過^ヲ到彼處^ヲ可有殊勝可慶之處
60 今十廿丁許^ト思^ヲ覺了
61 其次日清書^{云々} 莊ム記也

【訓読】

一、同じき二十一日の夜の夢に云はく、佐渡前司の許より送る書、大臣殿の御書かと思ふ。疊紙等の種々の物、五六種、之在り。心に思はく、此の時、十二月晦日なり。明日は正月一日なり。此の返書を遣らむと欲す。心に思はく、是れ大吉なり。又、夢に金堂の辺に切木の組有り。此の下に池有り。此を過ぎて紀洲に到る。其の次に至る処、又、殊勝なる靈処と思ふ。即ち之を行くに大海有り。

其の浜を行くに、大山峯有り。此を過ぎて、重々なる巖の有るべきを過ぎて彼の処に到らば、殊勝にして慶ぶべきの処有るべし。今十廿丁許りと思ひて覚め了んぬ。其の次の日、清書すと云々（莊嚴記なり）。

紀州の次に至るところが「殊勝なる霊処」であると記されること、そこに至るまでには海や大山峯、巖を越えることが記される。このような場所について記された夢には

【夢想6】⁴³

【翻刻】

- 1 在井ト奉念如瀧水之大河
- 2 ヲ落ニ左右山以外高駿也
- 3 見舉ニ大樹鬱茂山上

【訓読】

（前欠）在菩薩と念じ奉る。滝水の如き大河を落つるに、左右の山、以ての外に高駿なり。之を見挙ぐるに、大樹、山上に鬱茂す。

といったものがある。「在菩薩」は観自在菩薩を指すと思われるが、観音/観自在菩薩を念ずるという行為とともに記される山水は、明らかに補陀洛山を指している。『夢記』には他にもこのような情景への言及がある例が散見される。

【夢想7】⁴⁴

【翻刻】

- 一、有大磐石、高峯無極、海水自上流テ如瀧水、可慶殊勝之相アリ

【夢想8】⁴⁵

【翻刻】

- 一、有広博嚴麗大殿、海辺山水殊勝也、此处ヨリ「^(抹消)当」住房北方当レリ、心中住处者即賀茂之山寺也ト覚^ユ

【夢想8】では、補陀洛山の観音の宮殿を思わせる山水の北方に、自身の住处である賀茂別所があると明恵は考えている。補陀洛山は日本の南方にあることを前提にした内容であるが、2の図4-1、4-2で指摘したように、上賀茂社には観音が祀られており、明恵の時代に遡るかは不明であるが、祭神の本地が観音であるとされる。【夢想8】は【夢想1】で長谷寺本尊をボードガヤの金剛宝座と

の関係で連想したのと同様、上賀茂社を南方にある観音の聖地と関連させた夢ではないだろうか。

また特に次の【夢想9】に記される補陀洛山を思わせる情景は、観音が阿弥陀の脇侍であることを考慮することで「死夢」であると明恵が解釈したことが理解できる。

【夢想9】⁴⁶

大海ノ辺ニ大盤石サキアカリテ高^クソヒヘ立テリ、草木花果茂鬱^{シテ}奇麗殊勝ナリ、大神通力ヲモテ大海ト共ニ相具^{シテ}十町許ヲヌキ取^テ我^カ居処ノカタハラニサシツクト見^ル、此夢^ハ死夢ト覚^ユ、来世ノ果報ヲ現世ニツクナリ

【夢想9】では、観音自体は夢に姿を現さないが、【夢想5】にみられるように補陀洛山の観音の住处へ到りたいと願っていた明恵が、晩年には阿弥陀の浄土を意識し補陀洛山を夢見たことがうかがえる。明恵は安貞二(1228)年、『光明真言土沙勸信記』を撰述し、光明真言を極楽往生の真言であり、その他の諸仏にも有益であることを説いたが、その狙いは現世利益ではなく「現世と来世をつなぐ」点を重視している⁴⁷。明恵の現世・来世に対する考え方が観音の座す補陀洛山の夢としてあらわれていることがわかる。

5. 普陀山の観音―五秘密への階梯―

『華嚴經』や『大唐西域記』等に説かれる補陀洛山は、南インドに位置すると考えられてきたが、観音信仰が広まるにつれ、その写しとしての補陀洛山が、アジア各地にみられるようになった。中でも有名なのは中国の普陀山である。

普陀山は、中国浙江省普陀縣の東海上にある舟山群島の一島で、観音菩薩の霊場として現在も広く信仰を集めている。中でも「潮音洞」は海岸の岩場に開いた海食洞窟で観音が現れる所として知られている。観音信仰を説く經典は『妙法蓮華經』等があるが、補陀洛山の観音信仰は『華嚴經』に基づくものである。四明（浙江省寧波市）の地方志類のなかで現存する最古の『乾道四明図經』（乾道五（1169）年、張振等の撰述）には、

山下有善才巖獅子巖潮音洞皆観音化現之所紹興初給事中黄亀年嘗詣瞻礼俄観観音全身出現有賛具述其異⁴⁸

【抄訳】

山の下に善才巖・獅子巖・潮音洞有り、皆観音化現の所、紹興の初め、給事中の黄亀年がここに参詣し観音の

示現を觀て靈驗を賛え「賛」を作った⁴⁹

とある。

また、日本人僧の恵萼が五台山で得た観音像を安置した⁵⁰ことも知られている。この地に関する多くのエピソードの中で、史浩（1106-1194 南宋の第二代皇帝孝宗の宰相。子孫も宰相を務めた名家の一人。梁の武帝の行った水陸会を復活させたことでも有名）の観音靈驗譚が有名である。

紹興戊辰三月望日鄱陽程休甫四明史浩由沈家門泛舟遇風掛席俄頃至此翼蚤恭詣潮音洞頂礼觀音大士至則寂無所賭炷香烹茶但碗面浮花而已歸寺食訖与長老瀾公論文殊揀円通童子入法界事時再至洞前俯伏苔磴凝睇巖空惟乱石森森与尽欲返有比丘指曰巖頂有寶可以下瞰攀縁而上瞻顧之際瑞相忽現金色照耀眉目燎然二人所見不異⁵¹

【抄記】

紹興十八（1148）年、史浩は宝陀（補陀）寺に参詣し、文殊菩薩が善財童子を法界の理に悟入させたという経説について寺の長老と論じた。その後潮音洞に再び参詣すると、一人の僧侶が巖の頂の寶（あな）から下を見るよう言う。史浩がよじ登り振り返ると、金色に輝き眉目瞭然とした瑞相（観音菩薩）が現れた。史浩と共に参詣した程休甫も同じものを見た⁵²。

高山寺には建保三年頃から貞応三年にかけて、華嚴宗関係を中心とした南宋版の章疏がもたらされており、明恵は普陀山を経由するルートで入宋・来日した僧侶達から南宋の〈物〉（宋版一切経）や〈知〉（宋代華嚴経学、阿育王寺塔に関する知識）を取り入れていた⁵³。そのため、明恵は普陀山の観音信仰にも興味を持っていた様子が『漢文行状』の以下の記述よりうかがえる⁵⁴。建久末（～1199）年頃に、明恵は道忠僧都と同行（＝弟子）の喜海の三名で南苧磨島（紀伊国湯浅荘）に渡った。島の南端の西向きの洞に数枚の板で草庵を作り釈迦・十大弟子の図像を掛け、五日間読経念誦した。そして「彼嶋西面」結菴^ヲ之意趣者観音占^{コトハ}補陀落山ノ西面^ヲ帰順^{スルカ}安養本所事仏ニ之故也」、つまり島の西向きに草庵を作った理由として、観音が補陀洛山の西向きに安置されることは、阿弥陀如来の極楽浄土を根本とする仏であるから、としている。これは『華嚴経』において、観音は補陀洛山の西側に座することが説かれる（前項参照）のに基づいた記述である。この島での仏事はしばしば明恵が釈迦を思慕

した例として挙げられるが、場の設定に補陀洛山と普陀山の洞窟が考慮されたことにも注目すべきであろう。明恵はその後も苧磨島で仏事を行っている。

建曆三年初九月廿九日酉時、渡紀州白崎之次、於彼奥中宝峯、起慈悲心、為海中衆生誦此陀羅尼一遍、并為告滅後孤露悲泣、奉唱大恩教主宝号、又令諸衆誦光明真言并尊勝陀羅尼、願海中魚鼈鯨鯢螺鱗等衆生、必必当来世々奉値遇大恩教主、永可断愚癡業、于時於彼靈峯中小峯左方垂水上墨^乎点^{志天}含悲書之畢、同心道俗數輩^{阿利}、願世々流転の処、同見仏聞法必証二転依果而已、沙門高弁記之⁵⁵

【訓読】

建曆三年（＝1213年、引用者註）初九月二十九日酉の時、紀州白崎の次に渡る。彼の奥中の宝峯に於て慈悲心を起し、海中衆生の為に此の陀羅尼一遍を誦し、並びに滅後の孤露悲泣を告ぐ為、大恩教主の宝号を唱え奉る。又、諸衆に光明真言並びに尊勝陀羅尼を誦さしむ。願はくは海中の魚鼈鯨鯢螺鱗等の衆生、必々に当来世々、大恩教主に値遇し奉りて永く愚癡の業を断つべし。時に彼の靈峯中に於て、小峯の左方に垂水の上に墨をや点じて悲みを含み、これを書き畢んぬ。同心道俗數輩あり、願はくは世々流転の処、同じく見仏聞法、必ず二転依果（＝菩提と涅槃、引用者註）を証するのみ。沙門高弁之を記す⁵⁶。

ここでは釈迦に値遇することを願い、海中の衆生であるすべての「魚鼈鯨鯢螺鱗」に廻向するために光明真言等を同行に読誦させて供養している。このような場所で仏事を行ったのは、一般には釈迦への思慕のあらわれとして理解されているが、この仏事の前年に『摧邪輪』を撰述し、さらにこの年の6月には『摧邪輪莊嚴記』を撰述していることを【夢想1】【夢想5】を参考に考え合わせると、この場で仏事を行った背景には（普陀山の）観音への意識があったといえよう。また「慈悲心」を起こした対象が魚類であることは、後の五秘密への傾倒へとつながっているとも考えることもできる。

五秘密とは、金剛薩埵（金剛界現図曼荼羅理趣会の中尊。淨菩提心の象徴）とそれを囲む欲・触・愛・慢（煩惱の象徴）の四金剛菩薩の総称であり、真言密教で言う「煩惱即菩提」の悟りの境地をあらわしたものである。明恵は建久二（1191）年の19歳の時に、上覚から『五秘密儀軌』の伝授を受け、その後、顕教の五聖（毘盧遮那・

文殊・普賢・観音・弥勒)と密教の五秘密を「同体⁵⁷⁾」とするようになり、講義や伝授を行った。この背景には、『華嚴経』『光明覚品』と李通玄の説を参考にした仏光観を承久二(1220)年以降に修し、華嚴の三聖(毘盧遮那・文殊・普賢)との一体化による悟りを目指したことが挙げられるが、更に明恵は大悲をあらわす観音と成仏の相をあらわす弥勒を加えて独自性を打ち立てたことが指摘される⁵⁸⁾。

以下に明恵が観音と愛金剛菩薩に関して言及している部分を挙げれば

愛慢^ハ是大悲鉢用ナリ愛^ハ是観音ノ大悲愛^ハ并^ハ廣^ハ竭^ハ幢^ヲ
持^{スル}摩伽羅ノ魚王鱗族^ヲスステノコストコロナシノ并^ノ
大悲衆生界^ヲツクスカ如^シ⁵⁹⁾

とあり、観音の大悲をあらわす愛金剛菩薩が摩竭幢を持つのは、摩伽羅(想像上の巨大な魚)が魚類を残すところがないように衆生をすべて救うことと重ね合わせている。苅磨島での「宝峯に於て慈悲心を起し、海中衆生の為に此の陀羅尼一遍を誦し」た陀羅尼はどのような尊格のものかは判断がつかかねる⁶⁰⁾が、明恵はここで普陀山の洞窟に現れるとされる観音と愛菩薩とを重ね、海中の衆生への供養を行ったと考えることができよう。

なお、五秘密法を行じた明恵が(他の菩薩ではなく)愛金剛菩薩の象徴である摩竭幢を夢に見た例がある。早断はできないが、明恵にとっての愛金剛菩薩の重要性がうかがわれる夢である。

【夢想10】⁶¹⁾

【翻刻】

- 22 一従同六月一日一向三時修
23 五秘密其間光法兼修之
24 同一日夜夢^云
25 吉王女以鯨魚裏紙
26 持来令見之長八寸許也
27 朽曝^{タル}形而生身也漸々
28 張口又有足并行也
29 一大殿到無人之方待
30 予々有彼心然夜睹日
31 處出故不行(其夜深雨/洪水也)
32 案曰此五^ハ光法二種
33 三マヤ^ヲ見也思之

【訓読】

一、同じき六月一日より、一向に三時に五秘法を修す。其の間、光法、兼ねて之を修す。同じき一日の夜の夢に云はく、吉王女、鯨魚を以て紙に裏みて持ち来たり、之を見せしむ。長、八寸許りなり。朽ち曝^(つ)れたる形にして生身なり。漸々に口を張り、又足有りて、並びて行くなり。一の大殿有り。無人の方に到り、予を待つ。予、彼の心有り。然るに夜に日を睹る処に出づ。故に行かず(其の夜深雨、洪水なり)。案じて曰はく、此れ五密・光法二種の三マヤを見るなり。之を思ふべし。

【夢想10】から三ヶ月後の嘉禄二(1227)年九月に、明恵は紀州白崎の大石室(中間禪と名付ける)で五秘密法を修している⁶²⁾。石室の壁には五秘密曼荼羅や光明真言が書かれ、随喜した道俗は水中の衆生のために光明真言百遍を唱えている。五秘密法をこのような場所で水中の衆生を対象として修したのは、苅磨島での仏事と同様に、明恵が観音/愛金剛菩薩による大(慈)悲こそが一切衆生を救うと考えていたからではないか⁶³⁾。

6. 善妙への仮託

明恵は略年譜にも記したように、善妙寺という尼寺を建て、承久の乱の敗者側の女性たちの心の支えとなる場を提供したが、寺名となった善妙は、新羅国の華嚴僧として知られる義湘(625-702)の伝記に登場する女性である。善妙は新羅から唐に華嚴を修学に来た義湘に恋心を抱くが、義湘に仏道を説かれることで発心し、義湘の帰国の際、龍に変化してその航海を守り、帰国後は義湘が華嚴学を説くために必要な寺院を確保するために大盤石に変化するなど、義湘に身を捧げた女性であることが、『華嚴宗祖師絵伝』(高山寺蔵。制作に明恵が関与したとされる)のうちの「義湘絵」に描かれる。「義湘絵」の末尾には長文の問答形式で善妙の奇跡の意味が説かれており、義湘の事蹟よりも善妙に焦点をあてた内容であることが指摘されている⁶⁴⁾。

この問答の中に、以下のようなやり取りが見える。善妙が大きな龍に変じて義湘を追ったことは「執著(=着引用者註、以下同様)のとか(=咎)」⁶⁵⁾ではないかとする間に、善妙は龍だけではなく石にも変身しておりもし龍になることが「執著のとかあり」というならば、石になることは「心識な(=無)し」ということになる。善妙には義湘の行を支えたいという「大願」があるので「大神通力」を得て、様々に変身したのである。これは「観音の卅三身等の」ようなものである。だから善妙がこの世を嫌い「浄土に往生せんとおもはば、たなこころ(=掌)

をさ（＝指）す」ように簡単に往生できると答え、善妙を、衆生を救うために三十三種の変化をなす観音になぞらえている。さらに続けて愛には「親愛」と「法愛」があり、善妙は最初「有染の貪心」をおこしたが、後に「無染の愛心」をおこしているのだとする。そのような「愛心」は、他にも釈迦入滅の折に阿難が「悶絶のかなしみ」を味わったことにも見られるとする。

このような記述から、この絵巻において、善妙の義湘への思いは釈迦の弟子が師を深く慕うものとして、また義湘に対する働きは観音の働きと同等のものとして描かれていることが分かる。前項の五秘密の記述を参考にすれば、善妙は愛金剛菩薩に象徴される煩惱を昇華した存在として認識されていたといえよう。嘉禄元（1225）年8月16日、明恵は善妙を華嚴宗擁護の神として、白光神・春日明神とともに高山寺の鎮守として勧請した⁶⁶が、同月の12日より明恵は五秘密法を修している⁶⁷ことも、観音を媒介とした善妙と愛金剛菩薩との関係と捉えることができるだろう。

おわりに一紀州への最後の旅

以上、明恵が見た夢や修した仏事に華嚴変相図中の観音の影響や、補陀洛山への憧憬があることを指摘した。明恵にとって観音は、法然の著作への批判を行う上で自己の正当性を保証する尊格であり、紀州での仏事を行う場の設定において影響を与え、善妙という女性を通じて明恵が重視した「愛（心）」のシンボリックな尊格となり、五秘密思想を展開する上でも役割を担った尊格であったと考える。従来、明恵と観音（信仰）との関係は薄いものと考えられてきたが、それは明恵にとって幼少時より意識に組み込まれたデフォルトとでもいう存在であったため、更に意識的な発言がなかったことに加え、五秘密への転換、善妙のような女性への仮託へと展開したため、直接的な言及がなかったのではないだろうか。言い換えれば、明恵の僧侶としての特色として挙げられる点（紀州での修行や仏事、法然の著作への批判、五秘密への傾倒、善妙を神として祀り、善妙寺を建立する）には観音が基底としてあったともいえるだろう。（明恵の他の特徴として挙げられる釈迦信仰や兜率天上生、文殊信仰等は、同時代の他の僧侶、例えば貞慶等にもみられるものである⁶⁸）

なお、明恵との親交が知られる貞慶は、当初は明恵同様、兜率天上生への願いを持っていたが、海住山寺への移住にみられるように後には観音信仰を深めていった。貞慶の観音信仰は兜率天上生への不安・断念（兜率天よ

りも補陀洛山への往生の方が、行が未熟な者には容易である）によることが指摘されており、最終的には補陀洛山への往生をひたすら祈念するものであった⁶⁹。明恵の観音への態度とは大きく異なるが、両者の観音に関する交流等、今後の課題とすべき点が多い。また、不空羅索観音に関する明恵の発言を本稿ではほとんど採りあげていない。夢現に現れた観音をテーマにしたためであるが東大寺や興福寺との関係なども含め、更に考察を深めたい。

本稿で指摘したように、明恵と観音とのかかわりが多く見られるのは紀州の地であるが、紀州への最後の旅は寛喜三（1231）年4月である。湯浅宗景の子息景基は、白上峯の麓に建立した施無畏寺に明恵と同法を招き、梅尾高山寺の別所として寄進した。本尊は観音菩薩であり、敷地内での殺生禁断を一族連署で誓い、違反するものは放氏する規定も定めている。開山供養式を含む一連の出来事は「（湯浅、引用者註）一族結合の新しい枠組みを確認しあうデモンストレーション」として機能したが⁷⁰、本稿の視点からは、明恵の紀州への最後の旅も、観音にまつわるものであったことを指摘したい。

今回、『夢記』を通じて観音菩薩観を探ったが、稿者が最初に観音を意識したのは、故山田恵諦師（延暦寺座主）に関する記事⁷¹で、師が第二次世界大戦の折、沖縄より内地に向かう船に同乗した子どもたちの命を守りたいと考え、『観音経』を読誦し無事に目的地に至ったのを知った高校時代である。（記事の切り抜きを生徒手帳に入れていた）家族とともに西国三十三所を巡り、御本尊を拝し掛軸にご朱印を頂いたことも懐かしい記憶のひとつである。大学受験の折に『観音経』を時折読誦した甲斐あってか無事志望校に入学したが、その後日本の観音との縁は薄れていた。近年になって勤務上苦しむことがあり、2019年は奈良の長谷寺に参詣し御本尊の御足に祈念する機会を何度か頂いた。その頃予定していなかった本稿を完成できたことに、長谷寺の御本尊と御札の件でお世話になった修行僧の皆さまに深く感謝したい。2019年は原三溪と高山寺に関する原稿を公開したこともあり、三溪と関わりの深い鎌倉の円覚寺に参禅のご縁を頂いた。当初は数年ぶりに再開した坐禅が楽しく通い、当時は管長も観音に関してコメントしていたこともあって、観音熱（？）があがり今回の原稿を執筆する底流にもなったが、その後人間関係上の深い苦しみを抱えることになった。（円覚寺のサイトは2019年7月以前のものはすべて削除されている）2019年7月15日に最も傷つくこ

とがあったが、その折に長谷寺御本尊が靈驗仏と思わざるをえない経験をしたことも、心からの感謝をこめてここに明記したい。

なお、本稿を作成するにあたり、夢記の会（奥田勲他2015の編著者）の方々より有益なご教示を賜った。英語表現に関しては、木村真実・Gerard Nazarianの両氏よりご指摘を頂いた。また画像掲載にあたっては、賀茂別雷神社（上賀茂神社）、華嚴宗大本山東大寺、梶尾高山寺（五十音順、敬称略）のご関係の方々よりひとかたならぬご高配を賜った。ここに厚く御礼申し上げる。

【作品データ】（数字は法量（縦×横、単位はcm））

図1（1、2）：頼円筆、一幅、絹本着色、182.4×116.1、13世紀、東大寺所蔵（九州国立博物館2016 p.130より転載）

図2：明恵筆、一冊、紙本墨書、32.0×28.0、第十篇（承久二年十一月）、高山寺所蔵。明資二 p.81に影印、p.155に翻刻。（九州国立博物館2016 p.135より転載）

図3（1、2）：一幅、絹本着色、117.6×76.7、13世紀、高山寺所蔵（九州国立博物館2016 p.128、129より転載）

図4（1、2）：一幅、著色、220.5×240.3、室町時代後期、賀茂別雷神社（上賀茂神社）所蔵（『賀茂別雷神社史料』「絵図」賀茂別雷神社 2018（平成30）年 p.1、3より転載）

【文献略称】

1. 資料類

明資：『明恵上人資料』第一～第五 東京大学出版会 1982（昭和57）～2000（平成12）年

第一：『高山寺明恵上人行状』（仮名行状・漢文行状）、『明恵上人神現伝記』、『最後臨終行儀事』、『高山寺縁起』等所収。

第二：『明恵上人夢記』等所収。本夢記所収の夢想については、「篇」と「行数」を示した。

第三：『真聞集』等所収。

第五：『上人所作目録』等所収。

縁起：『高山寺縁起』

歌集：谷知子・平野多恵『秋篠月清集 / 明恵上人歌集』（和歌文学大系60）明治書院 2013（平成25）年

行状：『高山寺明恵上人行状』（仮名行状）

漢文行状：『高山寺明恵上人行状』（漢文行状）

山外本：奥田勲他2015掲載の夢記

大正蔵：『大正新脩大蔵経』大蔵出版

2. 論文類

石井教道1928：「嚴密の始祖高弁」（『大正大学学報』3 1928（昭和3）年6月）

石田尚豊1988：『日本美術史論集―その構造的把握―』中央公論美術出版 1988（昭和63）年 第二章

奥田勲他2015：奥田勲・平野多恵・前川健一編『明恵上人夢記訳注』勉誠出版 2015（平成27）年

大塚紀弘2017：『日宋貿易と仏教文化』吉川弘文館 2017（平成29）年 第I部第五章

九州国立博物館2016：『京都 高山寺と明恵上人―特別公開 鳥獣戯画―』2016（平成28）年10月

桑山正進他1999：桑山正進・高田時雄『西域行記索引叢刊 I 大唐西域記』松香堂 1999（平成11）年

佐藤成順2012：『宋代仏教史の研究』山喜房佛書林 2012（平成24）年 第三部第一章

柴崎照和2003：『明恵上人思想の研究』大蔵出版 2003（平成15）年

ジラルル1984：フレデリック・ジラルル「明恵上人の『夢の記』―解釈の試み」（『思想』721 1984（昭和59）年7月）

高橋修2016：『信仰の中世武士団 湯浅一族と明恵』清文堂出版 2016（平成28）年

『奈良六大寺大観』：同書補訂版 第十一巻 岩波書店 2000（平成12）年

前川健一2012：『明恵の思想史的研究―思想構造と諸実践の展開―』法蔵館 2012（平成24）年

水谷真成訳1999：『大唐西域記 3』平凡社 1999（平成11）年

森實久美子2009：「華嚴海会諸聖衆曼荼羅についての一考察―図様の源泉と思想背景を中心に―」（『国華』1362（114-9）2009（平成21）年4月）

注

1 「仏法王法滅尽了欵、凡非言語之所及、非筆端之可記、余聞此事、心神如屠」（『九条家本 玉葉 七』（治承四年十二月二十九日条）宮内庁書陵部 2001（平成13）年 p.233）

2 明資三 p.670

3 石井教道1928、末木文美士『鎌倉仏教形成論―思想史の立場から―』法蔵館 1998（平成10）年、前川健一2012、柴崎照和2003、野呂靖「順高編『五教章類集記』における明恵・喜海の成仏義解釈」（『佛教学研究』65 2009（平成21）年3月）、小宮俊海「『真俗雑記問答鈔』における「梶尾義」について―「我

- 見心形如月輪」解釈を中心に一」『智山学報』61 輯 2012（平成24）年3月）、同「高信撰『六大無碍義抄』の検討—明恵門下における密教の—様相—」『智山学報』66輯、2017（平成29）年3月等
- 4 拙稿「高山寺明恵上人七百年遠忌点描—大久保利武・内藤虎次郎（湖南）・堂本印象—」（『名古屋文理大学紀要』17 2017（平成29）年3月）図4。J-stage にて公開
 - 5 『高山寺資料叢書』（東京大学出版会他）が第二十四冊（2007（平成19）年）まで刊行され、その中に『明恵上人資料』第一～第五も含まれる。また、調査団員による研究成果は、田中久夫『明恵』（人物叢書）吉川弘文館 1961（昭和36）年、奥田勲『明恵—遍歴と夢』東京大学出版会 1978（昭和53）年等、明恵研究における根本的な研究書群として結実している。
 - 6 ジラール1984
 - 7 奥田勲他2015
 - 8 高橋修2016 第四および八章、小田誠太郎「円満寺の木造十一面観音立像について」（『和歌山県立博物館研究紀要』1 1996（平成8）年3月）
 - 9 「脇土、十一面観自在菩薩、〈相伝云、伝教大師御本尊云々、/ 或説、弘法大師御作云々、〉/ 弥勒菩薩/（中略）左右脇土、観音者古仏修復_レ之_ヲ、弥勒者新造也、/ 去承久年、雨尊共為覺嚴法眼之沙汰修造_レ之、同年四月廿六日上人開眼供養之」（縁起 p.634）
 - 10 「善妙寺本仏釈迦像年記」、毛利久「運慶・快慶と高山寺・十輪院」（『史迹と美術』255 1955（昭和30）年9月）に所収。
 - 11 根立研介『日本中世の仏師と社会 運慶と慶派・七条仏師を中心に』塙書房 2006（平成18）年 第二部附論
 - 12 「賀茂別雷神社境内絵図」。室町時代後期に写されたものだが、景観年代は鎌倉時代中後期とされる。仏教施設は神域より離れた場所にあり、南部に神宮寺観音堂・鐘楼・多宝塔が、西部に経所・多宝塔がみえる。
 - 13 『神道集』巻第五 廿六 御神楽事
 - 14 『白洲正子全集』第四巻 新潮社 2001（平成13）年 p.46
 - 15 奥田勲他2015 p.335-340「2-2 某年某月、二月夢記」のうち「同七日」条 前川健一担当。
 - 16 後世の作例だが「十一面観音図」（宗峰妙超賛、絹本墨画着色、14世紀、真珠庵所蔵）に舟を漕ぐ若者が描かれ、賛に「青衫童男」と、『観音経』に説かれる観音の三十三変化のうちの「童男身」を示す内容の作がある。（『禅林画賛 中世水墨画を読む』毎日新聞社 1987（昭和62）年 p.38-39）
 - 17 清水紀枝「東大寺大仏左脇侍と如意輪観音信仰」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第3分冊57 2011（平成23）年）
 - 18 『奈良六大寺大観』、東京国立博物館等『鳥獣戯画 京都 高山寺の至宝』2015（平成27）年、森實久美子2009等
 - 19 大正蔵72巻 P.93上
 - 20 柴崎照和2003第六章等を参照した。
 - 21 『奈良六大寺大観』
 - 22 奥田勲他2015 p.350-353「2-2 某年某月、二月夢記」のうち「同廿六日」条 平野多恵担当。
 - 23 ジラール1984は「聖僧は、この行為によって彼を「邪見の徒」—おそらくは念仏行者—から護り、彼を称えかつその心の罪障を清めて正しい道（「正見」）に導く意志を表している。「摩頂」の行為は、ここではおもに「浄化」の意味を持っているように思われる」と解釈する。
 - 24 石田尚豊1988、奈良国立博物館他『大仏開眼一二五〇年 東大寺のすべて』2002（平成14）年、森實久美子2009等
 - 25 柴田泰「中国における華嚴系浄土思想」（『華嚴学論集』大蔵出版 1997（平成9）年）
 - 26 野呂靖「中世華嚴教学における浄土義解釈」（『印度學佛教學研究』56-1 2007（平成19）年12月）、前川健一2012 第二章等
 - 27 『真聞集』末 明資三 p.202
 - 28 前川健一2012 p.147
 - 29 行状下 p.46
 - 30 横田隆志「長谷観音台座三枝説の形成」（『国語と国文学』92-5 2015（平成27）年5月）等
 - 31 『建久御巡礼記』「長谷寺」（藤田経世編『校刊美術史料 寺院篇』上 中央公論美術出版 1972（昭和47）年）
 - 32 桑山正進他1999 p.76
 - 33 水谷真成訳1999 p.74-75
 - 34 行状下 p.47
 - 35 四篇19行
 - 36 奥田勲他2015 p.156-157「1-6 建仁三年十一月、十二月夢記」のうち「同十二月十五日」条 小宮俊海、野呂靖担当。
 - 37 神野富一「補陀洛の自然相」（『甲南女子大学研究紀要』45 文学・文化編 2009（平成21）年3月）

- 38 大正蔵 9巻 p.718上
- 39 大正蔵 10巻 p.366下
- 40 桑山正進他1999 p.102
- 41 水谷真成訳1999 p.272
- 42 奥田勲他2015 p.318-321「2-2 某年某月、二月夢記」のうち「同廿一日夜夢」条 小林あづみ担当。
- 43 奥田勲他2015 p.444-445「4-9 夢記（互菩薩ト奉念）」平野多恵担当。
- 44 七篇50～51行、元久二（1205）年
- 45 九篇26～29行、建保六（1218）年
- 46 行状下 p.64 寛喜三（1231）年十月十日
- 47 粕谷隆宣「光明真言（土砂加持）信仰をめぐる」（『真言宗豊山派総合研究院紀要』12 2007（平成19）年 3月）
- 48 『乾道四明図経』（宋元方志叢刊第五冊）巻七 昌国縣・梅岑山 p.4901
- 49 佐藤成順2012による日本語訳。
- 50 『宝慶四明志』巻11、『仏祖統紀』巻42。なお普陀山の観音信仰については、西谷功『南宋・鎌倉仏教文化史論』勉誠出版 2018（平成30）年 第二部第五章に詳しい。
- 51 史浩が宝陀（補陀）寺の壁に刻した「越王留題」（『延祐四明志』（宋元方志叢刊第六冊）p.6366）
- 52 佐藤成順2012による日本語訳より適宜抜粋した。
- 53 大塚紀弘2017、野呂靖「明恵における宋代仏教の受容」（『印度學佛教學研究』66-2 2018（平成30）年3月）
- 54 漢文行状中 p.119
- 55 漢文行状中 p.120
- 56 小宮俊海「明恵と食物一霊供作法を基調として」（『智山学報』68 2019（平成31）年3月）の訓読を参照した。
- 57 野呂靖「明恵の顕密観一五秘密与五聖同体説を中心に」（『印度學佛教學研究』54-2 2006（平成18）年3月）
- 58 石井教道1928、柴崎照和2003等
- 59 『真聞集』本 明資三 p.186。そのほかにも奥田勲他2015 p.258には「愛・慢は是大悲の体用なり。次での如く、愛は是観音の大悲なり。謂はく、愛菩薩、摩竭幢を持つ。摩竭羅魚の、物を飲て遺す所無きが如く、菩薩の大悲は衆生界を尽くすなり」（大正蔵72巻96下）、「愛菩薩は是大悲、即ち十廻向なり。十住の大智、十行の理性顕発の行、此の二を和合して大悲を成ず。即ち理智・大悲和合するは、十廻向なり」（大正蔵72巻 p.97中）といった『華嚴仏光三昧観秘宝蔵』の記述が指摘される。
- 60 宝楼閣陀羅尼か。小宮俊海氏によるご教示。
- 61 奥田勲他2015 p.255「1-18 嘉禄元年、二年夢記」のうち「従同六月一日」条 奥田勲担当。
- 62 漢文行状（報恩院本）別記 p.225
- 63 参考までに明恵の講義（自撰の『不空羂索毘盧遮那大灌頂光明真言句義釈』）の聞書である『光言句義釈聴集記』に以下のような記述があることを示す。「サテ能詮（名をいう。形を示す「所詮」に対応する語。引用者註）'教ハ、不空羂索ト云ハ仏'大慈大悲ヲ以テ諸仏'ツナニシタルナリ、サレハ此'真言カ観音ヲツクリタルナリ、観音ヲ加持スルハ是一切衆生ヲ加持スルナリ、余レハ此ノ観音ト云ハ一切衆生ヲ合シテ一ニシテ観音トス、サテ一切衆生此'光明真言ヲ聞クニ功德ヲウルナリ」明資二 p.865
- 64 『日本の美術』413 華嚴宗祖師絵伝 2000（平成12）年 至文堂等
- 65 小松茂美編『華嚴宗祖師絵伝』（日本絵巻大成17）中央公論社 1978（昭和53）年 p.111。以下同様。
- 66 縁起 p.643
- 67 山外本1-18 p.249
- 68 仏眼仏母に関しては未勘であるが、観音との類似性から捉えられるだろう。
- 69 奈良国立博物館『解脱上人貞慶一鎌倉仏教の本流一』2012（平成24）年等
- 70 高橋修2016 第四章
- 71 1983（昭和58）年11月14日朝日新聞夕刊に掲載。朝日新聞社編『新入国記 7』1984（昭和59）年 p.23-24

图 1 - 1 「華嚴海会善知識曼荼羅」 頼円筆 13世紀 東大寺所蔵

図1－2 「華嚴海会善知識曼荼羅」(部分) 頼円筆 13世紀 東大寺所蔵

図2 『夢記』 明恵筆 高山寺所蔵

図3－1 「華嚴海会諸聖衆曼荼羅」13世紀 高山寺所蔵

图 3-2 「華嚴海会諸聖衆曼荼羅」(部分) 13世紀 高山寺所藏

図4－1 「賀茂別雷神社境内絵図」室町時代後期 賀茂別雷神社（上賀茂神社）所蔵

図4－2 「賀茂別雷神社境内絵図」(部分)室町時代後期 賀茂別雷神社(上賀茂神社)所蔵